

Julius Caesar 試論

——儀礼の象徴的機能からの一考察——

佐々木 和貴

(人文学部英文教室)

A. Study of *Julius Caesar*; An Analysis from the Symbolic Function of Rituals

Kazuki SASAKI

Department of English, Faculty of Humanities

(一)

Julius Caesar という作品の理解にとって、rituality という要素が無視できないものであることは、既に諸家の指摘する所である。例えば、E. Schanzer は、rituality を手掛りにして、Brutus の characterization を解釈しているし、⁽¹⁾また、B. Stirling は、ritualityこそが、*Julius Caesar* の “thematic design” であるとまで、断言している。⁽²⁾しかし、こうした諸考察においても、共同体秩序 (≡cosmos) と、それを取り巻く chaos の境界線上にあって、両者を媒介するという、儀礼の持つ象徴的機能への視点は、殆んど欠落していたと言っているのではないかと思われる。

そこで本稿では、作品に頻出する儀礼的要素の中でも、最も中心的かつ重要であると思われる、sacrificer と victim (≡scapegoat) という関係、つまりは供儀という意匠に注目し、儀礼、特に、供儀の象徴的機能についての考察を踏まえた上で、共同体秩序の破壊と再生をめぐる、cosmological なドラマとして、*Julius Caesar* を読み直してみたいと思う。

(二)

まず、議論に先立つ手続きとして、簡略ながら、供儀中心に儀礼の象徴的機能について、考察しておくことにする。

いわゆる「未開」社会には、その象徴的秩序の更新、再生のための手段として、種々の儀礼が存在する。なかでも供儀は、共同体の許容量を越えて、罪や穢れが蓄積し、秩序が危機に瀕したとき、それを victim に負わせて追放、抹殺し、chaos を回避するための儀礼であるから、共同体存立の基盤を成すものと言っていいだろう。つまり、供儀とは、「未開」社会における安全弁とも呼ぶべき、メカニズムなのである。しかし、そもそも人間とは、chaos を恐れるが故に秩序を創り出さざるを得ないという、特殊な本能を持った生物であるとする、現在人文諸科学で前提となりつつある人間観に立てば、⁽³⁾いかなる共同体も、その秩序を chaos から守るメカニズムなしでは、存立しえないことは自明な訳で、近年において、「未開」社会のみならず、「野生の思考」を捨て去ったかに見える我々の「近代」社会でも、形こそ変われ、供儀が存続し、また必要とされていることが、多様な問題意識を持った思想家たちによって、等しく指摘されていることは、けだし、当然のことと言えるだろう。⁽⁴⁾まことに、あらゆる共同体の存立を規定する論理が、他でもない、cosmos

と chaos の弁証法であることが明らかになりつつある今日、両者を媒介する象徴的機能を持つ種々の儀礼の中でも、前者を後者から守るという最も重要な機能を持つ供儀が、言わば特権的な儀礼として、ますます、人文諸科学の注目を集めていくことは、疑いのない所であろうと思われる。

以上の考察を踏まえた上で、本論にはிரりたい。

(三)

II. i. の Caesar 殺害のための謀議で、Brutus は、明らかに、行為自体ではなく、「いかに」殺すかを問題にしている。ただ殺すだけならば、“Caesar's angel” (III. ii. 183)⁽⁵⁾として信任厚く、常に身近に控えている Brutus にとって、さしたる難事ではない。まして、他の conspirators と示し合わせれば、万にひとつの仕損じもないだろう。だが、問題は、Caesar を殺せば、同時に、Caesar が体現している Rome という共同体の、象徴的秩序をも破壊してしまうことにある。⁽⁶⁾つまり、Rome という安定した cosmos が、恐るべき chaos に、さらされることになるのだ。従って、Caesar は、こうした危機を回避する形で殺害されねばならず、それが解っているからこそ、Brutus は「いかに」殺すかに、異常なまでに強くこだわって、Cassius に対しては “Let's be sacrificers, but not butchers, Caius.” (II. i. 166) と説き、さらに conspirators 全員に対しては

Let's kill him boldly, but not wrathfully;
Let's carve him as a dish fit for the gods,
Not hew him as a carcass fit for hounds.

(II. i. 172-4)

と、提案せざるを得ない。つまり、彼らの行為は、言わば、儀礼的暴力であり、Caesar の野望によって穢された、Rome という共同体を清めるために、Caesar を victim として、神々に捧げるのだと。

これを、頑迷な理想主義、あるいは、単なる自己欺瞞と取ってはなるまい。⁽⁷⁾むしろ、巧妙な戦略と考えるべきだろう。即ち、Brutus は、もし、Caesar 殺害を供儀に仕立てあげることが出来れば、殺害が共同体に必然的に持ちこむ chaos を、Caesar 自身に負わせて、共同体外へ追い払うことが可能となり、しかも、そうなれば、conspirators の行為は、かえって秩序を強化するものとして、共同体に承認されるだろうと、読んでいるのである。従って、Brutus の Caesar を「いかに」殺すかについての熱弁の結びの “We shall be call'd purgers, not murderers.” (II. i. 180) という予言も、根拠のない夢想ではなく、むしろ、供儀の持つ象徴的機能に精通した、恐るべき策師の、満々たる自信の表明と受け取るべきであろう。

この Brutus の読みを、他の conspirators が、どの程度のレベルで理解したかはともかく、少なくとも、彼らもまた、この後、Brutus の書いた供儀という筋書きに沿って、Caesar 殺害の準備を進めることになる。例えば、Decius Brutus は、殺害決行当日の朝、外出を渋る Caesar に対して、その原因である Calphurnia の夢を、

...from you great Rome shall suck
Reviving blood, and that great men shall press
For tinctures, stains, relics, and cognizance.

(II. ii. 87-9)

と、一見 Caesar を賛美するかの如く、解釈してみせる訳だが、その裏に、Caesar を martyr になぞらえる意図のあることが、“blood”, “stains”, “relics” といった言葉の端端に、はっきりと窺える。そして、martyrこそ、キリスト教文化圏における、victim の典型的形象であることを思えば、このせりふが、Brutus の筋書きを、密かに補強するためのものであることは、明らかな所だ。

さらに、同じ II. ii. の最後で、Caesar が、conspirators に向かって “Good friends, go in, and taste some wine with me;” (II. ii. 126) と呼びかけるとき、Decius Brutus のせりふを聞いた後では、尚更のこと、「最後の晩餐」を想起しない方が、返って不自然であろう。⁽⁸⁾つまり、Caesar 自身が、無意識にとはいえ、自らを最も聖なる scapegoat たるキリストに擬することによって、Brutus の筋書きに、一役買ってしまうのである。

かくして、下準備は整った。後は、出来るだけ Brutus の筋書きに沿った形で、実際に、Caesar を殺害すること、それだけが問題となる。従って III. i. Caesar 殺害の場合は、conspirators によって、意識的に、供儀に似せて演出されることになるのだ。通例、供儀という儀礼は、何らかの形で、victim にその罪を告白させ、しかる後に、victim を追放、抹殺するという、二つの過程より成っている。⁽⁹⁾それ故、conspirators は、まず、容れられるはずがないと解っている嘆願を重ねることによって、Caesar (= victim) から、罪の証拠となる尊大な発言を、引き出そうとするのである。そして、彼らの挑発に乗って、Caesar は

But I am constant as the northern star,
Of whose true-fix'd and resting quality
There is no fellow in the firmament.

(III. i. 60-63)

と、比喩的にはあれ、自らを王に擬していることを、告白してしまう。さらに、その尊大さが頂点に達し “Hence! Will thou lift up Olympus?” (III. i. 74) と、Caesar が自らを神々にまで喩えたとき、つまりは、供儀の第一過程が完了したとき、Casca の剣が降りおろされる。第二の、victim 抹殺の過程の開始である。そして、この過程を完了させるのが、sacrificers (= conspirators) の長たる Brutus の、とどめの一撃であることは、言うまでもない。

さらに、Brutus は、自らの供儀という演出に、最後の仕上げを加えるべく、conspirators に対して、こう呼びかける。

Stoop, Romans, stoop,
And let us bathe our hands in Caesar's blood
Up to the elbows, and besmear our swords:

(III. i. 105-7)

Brutus にしてみれば、Caesar の血は、供儀された victim の血である。つまり、それは清めの血なのだ。従って、その血を塗ることは、たとえ残酷に見えようとも、Caesar の野望という穢れを清めるための供儀の、最後を飾るに最も相応しい行為であると、Brutus が思ったのは、当然のことと言えよう。

そして、今や Brutus の筋書きを、正確に理解している Cassius が、この呼びかけに対し

Stoop then, and wash. How many ages hence
Shall this our lofty scene be acted over,

In states unborn, and accents yet unknown!

(III. i. 111-3)

と受ける。つまり、Caesar という victim を抹殺することによって、conspirators は、共同体を chaos から救い出したのだから、その気高い行為の場面は、秩序再生の記念として儀礼化され、未来永劫、演じ続けられるだろうと、Cassius は予言するのだ。

こうして、自らの行為を、一種の創世神話にまで擬しえたとき、conspirators は、栄光に満ちた未来を、確信していたことだろう。Caesar 殺害を供儀に仕立てあげるといふ、Brutus の巧妙な筋書きは、ここに見事に完成したかに見える。だが、Shakespeare の偉大な悲劇が常にそうであるように、こうした勝利の瞬間の直後には、没落への陥穽が待ち受けているのだ。

(四)

Conspirators の塗った Caesar の血が、まだ乾き切らないうちに再登場した Antony は

Now whilst your purpled hands do reek and smoke,
Fulfill your pleasure.

(III. i. 158-9)

と、彼らに対して訴える。さらに、彼らが退場した直後、一人残された Antony が、最初に発するのは

O, pardon me, thou bleeding piece of earth,
That I am meek and gentle with these butchers.

(III. i. 254-5)

という、悲痛な叫びである。つまり、Antony は、Caesar の血に、Brutus とは対照的な、もうひとつの血の象徴性を、見てとったと言えるだろう。暴力の証しであり、暴力に穢されたものであり、さらには暴力を伝染させるものとしての血。それ故に Antony は、“butchers” という、Brutus が最も恐れていた言葉で、conspirators を呼ぶのだ。皮肉にも、Caesar の血は、Brutus の筋書きの最後の仕上げをすると同時に、その筋書きを崩す突破口とも、なってしまったのである。この穢し、かつ清めるという、血の象徴性の ambivalence⁽¹⁰⁾を、正確に衝いたのみならず、Antony は、conspirators の仕出かしたことが、“dogs of war” (III. i. 273) 即ち、悪しき chaos を解き放ち、共同体秩序を危険にさらす暴挙であることを、見抜いている。彼の描く所の

... mother shall but smile when they behold
Their infants quartered with the hands of war,

(III. i. 267-8)

という地獄絵巻は、Brutus が Caesar = victim という筋書きによって、まさに回避しようとしたもの、つまり Caesar 殺害という disorder が、必然的に共同体にもたらす chaos 状態の、比喩的表現に他ならない。従って、Antonyこそが、Brutus の筋書きにとって最も危険な、それ故、Caesar の葬儀で一番演説させてはいけない人物だったのだ。それを、Brutus は見落してしまう。

しかし、それでも、続く III. ii. で、先に演説する以上、局面は、まだ Brutus にとって有利なはずであった。ところが、Brutus は、ここで、また決定的見落しをしてしまう。つまり、

Brutus は、この場が、共同体にとって、Caesar という強大な支配者 (= 王) の葬儀であるということの意味に、全く気がつかなかったのである。王の葬儀、それは共同体にとって、最も重要な儀礼のひとつなのだ。王の死は、共同体の成員に、必ずや、chaos への恐れを引き起こす。従って、共同体は、王の葬儀において、その死を悼むだけでなく、新しき秩序を確認せねばならない。まさに、王の葬儀とは、chaos を回避し、象徴的秩序を更新するという意味で、供儀と同一の機能を持つ儀礼だったのである。⁽¹¹⁾ それを見落したことが、Brutus には致命傷であり、Antony には天佑であった。

Brutus の演説は、それ自体としては、文句のつけようのない見事な出来であり、老練な政治家としての Brutus の手腕が発揮されていると言っている。例えば、

As Caesar loved me, I weep for him; as he was fortunate, I rejoice at it;
as he was valient, I honour him; but, as he was ambitious, I slew him.
There is tears, for his love; joy, for his fortune; honour, for his valour;
and death, for his ambition.

(III. ii. 25-29)

という、演説の中心的箇所を取り上げてみよう。まず、Brutus は、抽象名詞を多用することによって、生身の Caesar を覆い隠し、victim として抹殺することが許される、“ambition” という抽象的存在に、Caesar を仕立てあげている。その上、レトリカルで、何度も反復する構文が、群衆に対して、一種の呪縛力を及ぼすことまで、正確に計算済みなのだ。この Brutus の老獪さの前に、群衆は、Caesar が、自らの野望の報いを受けたと信じこんでしまう。つまり、Brutus は、彼の書いた筋書きを、群衆に受けいれさせることに成功した訳で、それこそが関心事であった以上、Brutus は、当然ながら “Live, Brutus! live! live!” (III. ii. 49) という、群衆の歓呼の声を引き出した時点で、演説を終えてしまう。ところが、前述したように、共同体の関心事は、新秩序の確認にある。だからこそ、共同体 = 群衆は

3. Pleb. Let him be Caesar.

4. Pleb. Caesar's better parts
Shall be crown'd in Brutus.

1. Pleb. We'll bring him to his house with shouts and clamours.

(III. ii. 52-54)

と、Brutus を中心とした、秩序の再編を提案するのだ。だが王の葬儀という儀礼の、この最も重要な瞬間に、Brutus は、共同体の期待を裏切ってしまう。彼はこの提案を黙殺し、あまつさえ、Antony の演説を必ず聞くよう群衆に命じて、その場を退出してしまうのだ。確かに、王たらんとする野望を未然に妨げるという大義の元に、あえて敬愛する Caesar を殺害した Brutus にとって、王になるなどもっての他のことであり、そのような提案をする群衆の無知蒙昧さに、失望を禁じ得なかっただろう。しかし、群衆 = 共同体にしてみれば、王の葬儀において、秩序の更新を拒否する Brutus の意図こそ不可解であり、従って、彼が退出した後、chaos への恐れを放置されたままの群衆が、わずかなきっかけでも、異常な興奮状態に陥り易くなっていることは、当然である。そうでなくては、いかな Antony とて、こう易々と勝利を得ることは、覚束無かつたらう。

登壇した Antony は、まず、Brutus が、極力抽象的次元で、“ambition” という共和政体への致命的悪として語った Caesar を、徹底して、具体的な行為の次元で、生身の肉体を持った存在として語り始める。「Caesar は、多くの捕虜を Rome へつれてきて、その身代金を国庫へ収

め、窮民たちと共に泣き、捧げられた王冠を三度まで拒み、諸君らのために遺言を残し…」等々。その結果、最初は、Brutus の演説に呪縛されていた群衆は、Antony の演説が進むにつれて “They [Conspirators] were villains, murderers!” (III. ii. 157) と、絶叫するに至る。つまり、Antony は、Brutus の Caesar = victim という筋書きの抽象的偽装を、具体性に徹することによって、突き破ることに成功したのだ。さらに、続いて Antony は、既に異常な興奮状態の群衆を巧みに扇動して、conspirators への敵意を決定的にするために、彼らの眼前で、Caesar 殺害を再演してみせる。しかも、Brutus の供儀としての演出を、あざ笑うかのような形においてである。即ち、Antony は、Caesar の mantle を持ち出してきて、そのひとつひとつの裂け目が、誰の剣によって出来たものであるか、また、conspirators の儀礼的演出に反して、その剣が、Caesar に、いかに残虐な傷を負わせたかを語るのだ。こうして、群衆を conspirators に対する激昂の頂点に追いこんだ Antony は、最後の切り札として、Caesar の遺体を、群衆の目にさらす。

Look you here!

Here is himself, marr'd, as you see with traitors.

(III. ii. 198-9)

その遺体から流れる血は、もはや Brutus らの塗った、供儀したばかりの victim の、清めのための新鮮な血ではなく、既に古び凝固し始めた血である。それは暴力の証しであり、群衆を暴力へと押しやる、呪われた血なのだ。“Caesar's spirit” (II. i. 169) だけを殺そうとした conspirators の行為は、まさにそれが必然的に伴う血の象徴性の ambivalence を、Antony に決定的な形で衝かれたときに、供儀から屠殺へと、完全に変容させられるのである。

(五)

我々がここまでたどってきた、Brutus の書いた供儀という筋書きをめぐるのは、この Antony の演説の後、特に論ずべき展開はない。だが、これ以降においても、供儀という意匠は、もう一度、しかも我々の視点からすれば、重要な意味を持つ形で、出現する。そこで、最後に、この箇所を分析してみたい。

V. i. Philippi の野で、開戦前に、Antony 側と Brutus 側の間で舌戦が交えられるのだが、注意深く読めば、それが、供儀における第一過程、即ち、victim の罪の告白過程に他ならないことが見えてくる。それを明瞭に示すものとして、Antony と Cassius の以下のやりとりを取りあげてみよう。

Ant. Villains! You did not so when your vile daggers
 Hack'd one another in the sides of Caesar:
 You show'd your teeth like apes, and fawn'd like hounds,
 And bow'd like bondmen, kissing Caesar's feet;
 Whilst damned Casca, like a cur, behind
 Struck Caesar on the neck. O you flatterers!

Cas. Flatterers? Now, Brutus, thank yourself.
 This tougue had not offended so to-day,
 If Cassius might have rul'd.

(V. i. 39-47)

Antony の頭ごなしの決めつけは、言ってみれば、供儀における、victim の罪の告発に相当するだろう。つまり、Antonyは、sacrificer の役を演じているということになる。これに対して、当然反論すべき Brutus は沈黙し、Cassius に至っては、仲間の Brutus に、いらだちをぶつける始末である。要するに、両者とも、告発された罪を認めてしまうのだ。そして Brutus 側が、こうして無条件で、victim の役を振り当てられ、供儀の第一過程が完了してしまった以上、勝負の帰趨は、ある意味で、既に決してしまったと言ってもいい。続く実際の戦闘が、sacrificer による victim の抹殺という、供儀の第二過程に過ぎなくなってしまうからである。そして、この戦争という巨大な供儀⁽¹²⁾ が終了したとき、Rome という共同体が、ついに、Caesar 殺害によって持ちこまれた chaos を祓い清め、同時に、Caesar の葬儀で宙に浮いていた、象徴的秩序の再生を果たすことになるのは、言うまでもない。

(六)

以上の考察から、従来比較的注目されることの少なかった、供儀等の儀礼の持つ象徴的機能に、意識的に焦点を当てることによって、*Julius Caesar* が、共同体秩序の破壊と再生をめぐる cosmological なドラマとして、立ち現れてくることが示されたと思う。また同時に、共同体秩序に関するテーマが、Shakespeare という作家の発想の、恐らくは根幹に位置するものであることと、彼の作品には、制作時期やジャンルを問わず、victim 的性質を持った character が数多く登場することを、考え合わせれば、本稿で取ったアプローチが、*Julius Caesar* 以外の作品でも、有効な可能性の高いことが、示唆されたと言ってもいいだろう。⁽¹³⁾

(註)

- (1) Ernst Schanzer, "The Tragedy of Brutus" (1963), in *Shakespeare, Julius Caesar; a Casebook*, ed. P. Ure (London: Macmillan, 1969), pp. 183-94.
- (2) Brents Stirling, "Or Else Were This a Savage Spectacle" (1956), in *Shakespeare; Modern Essays in Criticism*, ed. L. F. Dean (Oxford: Oxford U. P., 1967), pp. 206-17.
- (3) こうした人間観に立って、文化を解釈しようとする試みとしては、例えば、竹内芳郎の『文化の理論のために』(岩波書店、1981年)がある。現時点では、最も整合性の高い議論を展開しているので、参照されたい。
- (4) 文芸批評家としては、Kenneth Burke が、いち早く1940年代に、供儀というメカニズムに注目し、文学型式としての scapegoat 論を提示している。cf. "The Philosophy of Literary Form" in *The Philosophy of Literary Form* (3rd ed.; Berkeley: Univ. of California Press, 1973), esp. 39-51. また、我が国における scapegoat 論の先駆者としては、文化人類学者山口昌男がいる。彼が1960年代から展開してきた、scapegoat を核に据えた文化理論を知るためには、『歴史、祝祭、神話』(中央公論社、1974年)が、最も適当であろう。さらに最近では、偉才 Rene Girard が、精力的に供儀論に取り組んでおり、*Violence and the Sacred*, trans. P. Gregory (Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press, 1977) では、供儀の構造を分析することによって、社会形成の基本的論理を提示するという、野心的試みを行ない、内外の注目を集めた。また、社会思想史の今村仁司は、これらの著作に触発された形で、『暴力のオントロジー』(勁草書房、1982年)において、「第三項排除現象」と名付けた、独自のscapegoat 論を展開し、社会哲学に、供儀という視点から、切りこんでいる。その他、部分的に、供儀あるいは scapegoat に触れた著作となると、最近では、枚挙に暇がないほどである。
- (5) テキストは *Julius Caesar* ed. T. S. Dorsch (London: Methuen, 1955) による。
- (6) Caesar 殺害について、こうした視座を設定するにあたっては、Sigurd Burkhardt の秀逸な議論から、示唆を得たことを記しておく。cf. "How not to Murder Caesar", in *Shakespearean Meaning* (Princeton: Princeton U. P., 1968) pp. 3-21.

- (7) 例えば、E. Schanzer ほど周到な批評家でさえ、Brutus のこの 儀礼的態度については、“self-delusion” という言葉で、片づけてしまっている。cf. Schanzer, *op. cit.*, p. 188.
- (8) これが、あながち筆者のみの読み込みではない証拠として、Penguin 版では、この箇所 “Shakespeare employs the classic symbols of betrayal: the murderers taking wine with the victim just before the killing.” という注が、付いていることを掲げておく。cf. *Julius Caesar*, ed. N. Sanders (London: Penguin Books, 1967), p. 187.
- (9) 供儀の詳しい手順については、山口、前掲書、p. 102 を参照されたい。
- (10) cf. Girard, *op. cit.*, pp. 36-39.
- (11) この節は、山口昌男の『新編人類学的思考』（筑摩書房、1979年）の中、「王権の象徴性」という論文に、発想のきっかけを負っている。
- (12) 1949年、ジョルジュ・バタイユが、初めて全面的に展開したときは、孤立無援に近かった、戦争を巨大な供儀として捉えるというこの視点が、現在では、むしろ常識として、一般に受け入れられている。我々の側の、知のパラダイムの変容を示す、好例と言えるだろう。cf. G・バタイユ『呪われた部分』（二見書房、1973年）esp. 11-105.
- (13) 具体的に言えば、恐らく、こうしたアプローチを重ねることによって、喜劇では Antonio, Malvolio、史劇では Richard II, Falstaff, 悲劇では Hamlet, Coriolanus といった、個別的には、みな、既に victim 的性質を備えていることが指摘されている character を、共同体秩序とからめて、総体として論じる視角が得られるものと、筆者は予想している。従って、本稿は、Shakespeare における「scapegoat 論」という、この筆者の構想のための、第一歩の試みということになる。

(昭和59年9月28日受理)

(昭和59年10月30日発行)